427

桐木遺跡

（曽於郡末吉町通山字桐木）

位置と環境

遺跡は現在，東九州自動車道の末吉・財部インターとして利用されている。それまでは，北に霧島連山を望み，国道10号線を境に北側が耳取遺跡，南側に本遺跡があった。遺跡は標高350mの台地面に展開し，台地周辺はヤツデ状に大きく深く開析され，独立した景観をなしている。遺構・遺物の大半は，北に開いた緩やかな斜面に集中し，そのため北方向の耳取遺跡と北西側に開析した谷を意識した遺跡溝造を強く印象づけている。

調査の経緯

調査は，東九州自動車道（国分IC～末吉IC）の建設に伴い，県教育委員会が調査主体になり，平成８年（1996年）に確認調査を，平成９年５月から平成14年（2002年）３月まで本調査を実施した。調査対象面積は，約50,000㎡である。

遺構と遺物

遺跡は，シラスまでに18枚の層位を観察でき，その間最も密集する場所では10枚の遺物包含層が存在していた。その間に噴出起源や噴出年代の明らかな火山噴出物が多数堆積し，遺跡の解明に大きく貢献した。

各層毎の遺構・遺物は以下の通りである。

IIIa 層　古代一近世の遺跡

IIIa 層　古墳時代（成川式土器）

IIIb 層　縄文時代晩期（住居跡５軒・入佐式土器・石斧・玉類）

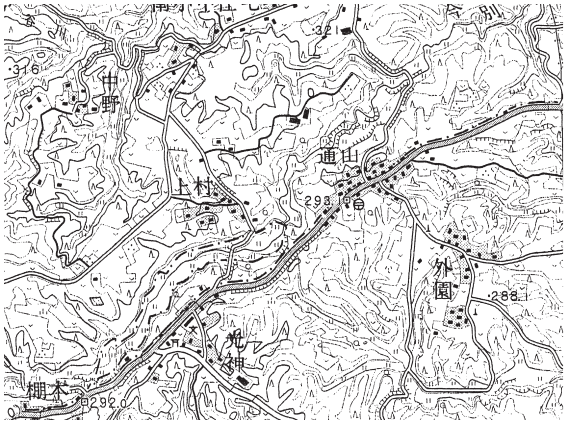
Ｖa 層　縄文時代中期（条痕文系尖底土器・船元式土器・石鏃・石匙・石皿）

VIa 層　縄文時代早期（集石遺構・塞ノ神Ｂ式土器）

Ⅶ 層　縄文時代早期（集石遺構・塞ノ神Ａ式・平栫式・石坂式土器）

Ⅷ 層　縄文時代早期（住居跡２軒・集石遺構・吉田式・前平式土器）

Ｘ 層　縄文時代草創期（集石遺構・隆起線文土器・石鏃）



第１図　桐木遺跡の位置

ＸＩ層　旧石器時代　（礫群・細石刃・細石核）

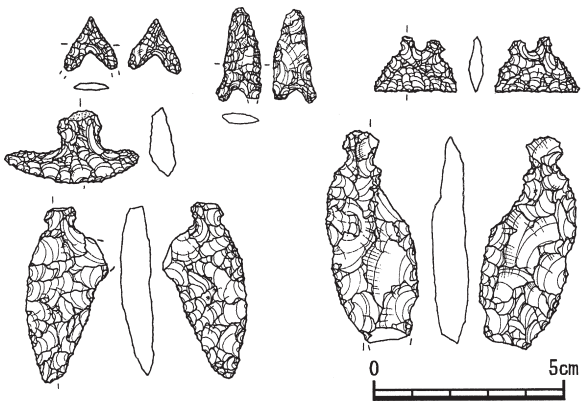
ⅩⅦ層　旧石器時代　（礫群・ナイフ形石器・剥片尖頭器）

IIIｂ層の縄文時代晩期の５軒の竪穴住居跡は，ヤツデ状に取り残された台地の先端部に１軒ずつ点在するように発見されている。

Ｖ層からは，大量の石鏃・石匙の石器類と，搬入品の船元式土器と南九州在来の条痕文尖底土器が共伴し，搬入土器は瀬戸内海沿岸で盛んに作られた縄文時代中期を代表するものである。なお，これらの土器は直接持ち込まれたと考えられる。

VIa 層とⅦ層は，VIb 層の軽石層を挟んで上に塞ノ神Ｂ式土器，下に塞ノ神Ａ式・平栫式・石坂式土器が出土し，土器型式の前後関係が明らかになった。

Ｘ層の隆起線文土器は，本県に広く分布する隆帯文土器とは異なり，器壁が薄く焼成が堅く隆帯が細いものでむしろ関東地方で見られるものに近くその特異性が注目される。



第２図　Ｖ層出土石器

ＸＩ層は，細石刃文化期，ⅩⅦ層は，ナイフ形石器文化期の遺物が発見されている。特に，細石器は石器製作の生活の様子が各所でそのまま残され，数千点の遺物が出土している。最下層のナイフ形石器文化期は大型の剥片尖頭器を主体とし，また，15～20cm程の礫で構成する礫群が発見されている。

特徴

本遺跡は，霧島・桜島・鬼界カルデラ・姶良カルデラ関係のテフラが整然と堆積し，その間に遺構や遺物が残され，層位的観察が容易であった。遺物包含層も10枚あり，また，遺物の量も圧倒的に多く，当時を解明するに欠かせない遺跡である。

資料の所在

出土遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管し，一部は公開展示されている。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター2005「桐木遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』91

（長野眞一）

第３図　Ⅴ層出土遺物